

平成30年度第1回 滋賀県ふるさと・水と土保全対策事業懇話会議事録

日時：平成30年11月1日（木） 11：00～15：20

場所：（現地調査）長浜市北野町地先古民家

（会議）五先賢の館＜長浜市北野町 1386＞

出席委員 池田美由紀 伊庭治彦 上田和子 上田洋平 大澤 誠 藤本泰治
前川真司 松田規久子 萬木敏文

【現地調査】

長浜市田根地区地域づくり協議会より大学生との交流拠点である古民家にて、交流活動内容等の説明をいただき調査を実施した。

【会議】

議題1 長浜市田根地区における住民主体の地域づくりと大学生との交流について

田根地域づくり協議会より資料1に基づき取組の説明を受け、意見交換を行った。質疑応答は以下のとおり

- （委員） 役員の方の世代の方と他出子と言われる若い世代の方およびこの地域出身の大学生との意識や繋がり、変化などはどのようなものがあるでしょうか。
- （地元） 一例として、慶応大学やMITの学生と交流を図った小学生が現在、大学生となったが、今でも慶応大学の学生が来ると駆けつけてくれ、関わりを持ち続けてくれている。地元の大学生はほとんど県外に出て親から離れて暮らしており、地域に若い後継者が育っていない状況である。
- （委員） とても素晴らしい活動であると思います。その中で、活動費用はどのようにされているか、運営にあたり14集落の関わりをどのようにされているか、次の世代の育成をどのようにされているかの3つについてお聞きしたい。
- （地元） 地域協議会等の役員活動はほとんどボランティアである。地域づくり協議会の活動費は長浜市からの助成である地域活力助成金を活用しており、社会福祉協議会からの助成等も活用している。また、地域活力プランナーは長浜市の助成により、地域づくり協議会で雇うことができるが、プランナーは自ら活動しなければならぬことから今までは成り手がいなかった。今年は1人来てくれたので、思い切って市に要望を出した。私も総務企画部長も協議会設立当時から役員に従事しているが、なかなか役を降りることはできない。

後継者を育成することは現実的に難しい。私の後継者は目星をつけているが、活動はボランティアであり、損得なしに活動しなければ前に進まないことから、その心意気が大事である。地域を何とかしていきたいとの思いが活動に繋がっていくと思っており、そのような人材を育成することは大きな課題であります。

(委員) 一番大事なことは、受入れ側の後継者をどう育てるかということでありませう。そこが出来れば、まさに優良事例であり、どのようにすればボランティア的な活動に従事してもらえるか、大きな課題だと思います。

(地元) NPOなどは一つの目標に向かう人々の集合体であり、おおむね運営は上手くいくと思いますが、地域づくり協議会は地域のあらゆる課題に対応しなければならず、共通の課題を持って活動することが難しい面がある。役員も年毎に替わることから、継続した取組は難しい面がある。小学校の存続問題をとっても、様々な意見がある。大きな小学校と統合した方が上手くいくだろうという人もおられ、意思統一を図ることは容易ではない。

(事務局) 地域プランナーの方にお聞きしたい。どのような形でこちらに関わりを持っておられるのか。

(地元) 今、大学4回生ですが、大学を休学してこちらの役に従事しています。

(事務局) 県も事業の実施に大学生の力を借りたいと考えている。田根地区は長期間にわたり活動が継続してされているが、どこに、田根の魅力を感じておられるのか。資料には何も無いのが魅力と書かれているが、地域の人々の魅力なのか、自然なのか、これだけ長く続く理由をお聞きしたい

(地元) 私が関わりを持たしていただいたのが3年程前からである。私は東京や神奈川で育ち、こちらにある古民家のような自然に触れる住まいに関わることが今まではなかった。こちらの古民家について、建築物として興味が湧いたことから、ここに伺うこととなった。最初は原風景に魅力を感じて参画したが、来るたびに様々な関わりを持つことで人々の温かさで気持ちも変化し、地域の問題をどうにかしたいとの気持ちが芽生え、参画したいと思うようになった。

(事務局) ありがとうございます。

(委員) 他に質問のある方、お願いします。

(委員) 今も関わりのある若い人と今後、どのようにしていきたいか。

(地元) 東京の大学生と地域の若者、小学生が交流を持つことで地域が活性化されるならば、その機会を増やしてしていければと思う。

(委員) 最近の学生はなかなかボランティアでは動かないところがある。単位をつけて、カリキュラムの一環として対象となる農家さんに例えばインタビュー

一をして、プレゼンテーションを聞いてもらう等でないと来ないと思っている。純粹に棚田ボランティアを募集します。単位はありませんといった形で学生は参加されますか。

(地元) 人によります

(委員) 以前に比べ、減ってきていると思う。昔は大学の掲示板に何月何日ボランティアを行いますと出ていたが、今はない。ただし、大学でワークショップを行い、単位を出しますとすると、結構集まる。そういうものでないか。

(地元) 今の大学生、若い人に共通していることだが、自分にメリットがないと来ないところはある。単位であったり、自分の勉強分野であったり、自分にプラスにならなければ、興味を持たないところはある。

(委員) その対応を受け入れ側にも勉強してもらう、体制を整備してもらうことも必須と考えます。

(委員) とは言いながら学生が地域に入り、単位かお金か自己実現、これが3大要素であります。単位で入っても最終的には自己実現のためとなり、単位のことには忘れていたところもある。それに関わって3つの「いる・する・なる」と言っているが、地域の人は何をしてくれるかと思っているが、長くつづけると使用価値「する」よりも存在価値、居てくれることがうれしいことが大きくなっていく。最後に「なる」はそれを通じて、新たなものになっていくこととなる。

最初の入り口は単位のためであっても、自己実現ができることを認識してもらうためには、地域の方にも理解をしていただけるとスムーズに進むところはある。

(地元) 過疎対策の研究で学生が地域に来られることがあるが、最近の学生はインターネットを活用するため、一定の答えは出る。学生が地域に入るとコミュニケーションが生まれ、交流が活発になる。ただし、学生が地域に入ることについては、反対意見もある。また、学生が提案したことが絵に描いたように進むわけではない。いろんな意見にもまれることは学生にとっても大きな経験であると思います。

(委員) 県立大では年間400人程の学生がフィールドワークで地域に入る。地域に入れば様々な交流が生まれ、「ありがとう」「ごめんなさい」といった関係が生まれる。地域と信頼関係ができていないと活動は難しいところはある。何でもお膳立てしても駄目である。

(委員) 他に意見はありませんか。では議題2、3について、事務局より説明願います。

議題2 ふるさと・水と土保全対策、棚田地域の総合保全対策のH29実績等について

議題3 しがのふるさと支え合いプロジェクトについて

<事務局より説明(資料2・3)>

- (委員) しがのふるさと支え合いプロジェクトに参加、登録を増やすヒントや事例など、ご意見をお願いします。
- (委員) 余呉地域では大学のカリキュラムではなく、学生が自主的に運営するボランティアサークルが社会福祉協議会を通じて10年間、集落でボランティア活動を行っている。そのようなサークルはどのくらいの組織があるのか、どのような地域で活動されているのか、事例があれば教えていただきたい。また、学生が地域に入る時、自分たちでどのような解決の仕方をするのか、自分たちで勉強し、組み立てを行い実施されていると思うが、そのような活動を広げていくことは可能か、大学の先生にお伺いしたい。
- (委員) 今の話は集落と学生がいかに繋がりを持つかということであると思いますが、いかがでしょうか。
- (委員) 県内の大学と地域の関わりは環びわ湖大学コンソーシアムで一定は把握していると思うが、何百人の先生が個別で動かれているので、全ての実態を把握しきれていないのが現状と思います。田根のように様々な大学が調査に入ってくると調査地被害になりかねない場合もある。各大学も掴みきれていないと思う。ただし、本学は近江楽座というシステムで学生が地域の方々と一緒に地域課題に取り組むプロジェクトを立ち上げ、審査を通して50万円の活動経費の支援を行っている。すべてが農村に入っているわけではないが、年間20数チーム、約500人の学生が地域に入って活動を行っている。
- (委員) 学生の方の意見は
- (地元) 大学と地域が連携しているプロジェクトになると、学部内のサークル単位では認知していない。ほぼ、研究室やゼミの先生と共に、研究を行うといった関わり方をとっている。
- (委員) ボランティアで地域と関わりを持つことは極めて難しい時代になった。学生のサークルは〇〇ボランティアサークルではなく、〇〇研究会として、自分の関心のあることにアプローチしていくことが必要なので、棚田のために〇月〇日に泥上げに来てほしいと言ってもなかなか集まらない。そこで人を集めようとする、過疎研究会に対し、過疎の研究をしましようとか、あるいは教員が交流会でゼミやワークショップを行う場を提供してもらおうものにくっつけて行うような形でないと、難しい。純粋に作業をボランティアでしてくださいとすると、入口としてはおそらく失敗すると思います。

入口は大学のカリキュラムとし、対応しながら徐々に引き込んでいくのが良いのではないかと思います。

(委員) 資料1にも学生のこよみと地域のこよみを合致させることは難しいとある。そこは理解いただいて、こちらも歩み寄りを行うが、人足仕事だけを求めてしまうと難しい。

(委員) 日当をだすとかではなく、関心を抱かせることが重要。

(委員) 以前、学生になぜ、ボランティアに来るのか聞いたことがある。基本的には学生時代に過疎地域の集落を支援することで、就職時に役立つとのことであった。ただし、集落の人が1回生～3回生まで続けて面倒を見てくれると、入り口は就職のためと思って来たが、徐々に地域に入っていくことが喜びとなったとのことであった。

(委員) 福祉系の大学の先生がはじめられた事例を社協の職員が見て、先生にお願いしたところ、学生も参加されることになったことが始まりと聞いている。

(委員) 県の事業により地域を活性化させるためには、地域活動とある意味企業活動的な経済活動を両輪で動かしていかなければならないと思います。私も奥永源寺地域に地域おこし協力隊として赴任し、地域が好きになり、この地に永住しようと考え株式会社を作って生きているが、地域を愛してるからとはいえ、収入が0であるのに家族を養うことを考えると、朝から地域活動に時間を費やせるかは現実問題として無理である。やはり、そこが両輪として動くことで初めて、地域を担いながら将来を背負っていく若者が子育てをしながら、地域に暮らしていくことができる。

小学校の存続問題も最近あったが、結局のところ小学校が維持できず廃校となるのは、その地域で働く環境、雇用がなく、仕事場を求めて街に出て行ってしまったためである。

奥永源寺は小学校も中学校も廃校であり、そういった現実になっていく。県の事業は地域活動を支援するものであるが、県なり、市なりが、若者に適切な支援とともに、経済活動を動かしていくところを念頭においた計画づくり、地域支援を導いていかなければ、無駄に終わってしまうと思います。経済が動かなければ、維持することは難しいと思います。

(委員) ありがとうございます。事業をいかに自律的に継続させるかについて、意見をいただきました。

(委員) 10月28日に土山町山女原集落の棚田ボランティアに参加しました。この地域は、かつては50あまりの家があったそうだが、現在は18戸40人あまりの集落です。50歳以下の方はおられないとのこと。当日はくるみの木の根元の草刈等が行われ、資料にもあるが、豊田紡織滋賀からも参加されました。参加者は地元の方が10名ほど、県職員が3名、豊田紡織滋賀さん

と少し目的のある私、そして純粋なボランティアは2名ほどであった。ボランティア参加者に参加理由を聞いたところ、お一人は定年を機会として第2の人生で地域貢献したいとのことで今年の5月から各地を廻りながらボランティアに参加しているとのことであった。

クルミの木は今年で5年めとなり、収穫もできるようになったとのことであった。また、夏場はカブトムシの里を地域で運営されている。

50歳以下の方がおられない集落であるが、豊田紡織滋賀さんや農業生産法人の方が入られていることで、ボランティアも継続できているのかなと思う。企業と集落が協働作業を行うことは大事だと思いました。

野洲川の源流地域でもあり、治山治水の観点からも維持をしていかなければならない地域であります。いかにして集落を守っていくかということは、私の集落も同じであるが、大事なことであると感じました。

(委員) 県から説明のあった本プロジェクトは素敵だと思いますが、単に事業として終わるのではなく、これを起爆剤として、次世代の育成を図ることが大事だと思います。地域も組織も次世代をどう育てるか、参画してもらうことが、このプロジェクトの命運がかかっていると思います。

(委員) 先日、知事が「やまの健康」の推進にかかるプロジェクトチームを部局横断の職員で作られ、山村、中山間地域をどのように守っていくのかとの話があった。事業を推進する中間的な組織が必要と考えるが、市も県も直接実施することは、現段階では難しいと考えます。県や市と活動を実施している方々が活動を行う仕組みや体制づくりを行い、継続した活動が出来ればと思います。

(委員) 新しい形として、学生の普段の関わりの中で企業との出会いの場をつくり、地域と一緒に作業を行い、企業とはどのようなものか、肌で感じる機会を持たないかと考えている。企業にとっては研修の場、学生にとっては、就職活動に向けた前段階での企業との出会いの場となる。地域貢献の場として、両者に声掛けできないかと考えている。

(事務局) 今日の話の中で、学生はメリットがなければ参加しないとあったが、そのメリットをいかに見つけていくか、田根地区の話を聞かせてもらった時に、素晴らしい資源はあるけれど、その利用の仕方によって、学生もメリットに感じてもらえる。また、皆様の意見をお聞きしながら事業進めていきますので、よろしくお願いします。

(委員) 本日、田根地区に初めて伺いましたが、文化資源がたくさんある地域であり、看板も設置され、家並もきれいですので、観光にもっと力をいれてもよいのではと思いました。

(地元) 自分自身、本当に良い地区だと思っている。東京から移り住んでこられた

方も様々な地区の空家を見てこられた中で、兄に一度、田根を見てくればと言われ、田根にこられたらすごくはまってしまわれた。空家をさがしたいとの申し出があり、空家を紹介した。

今はパソコン一つで世界に日本の商品を紹介する仕事をされている。

(委員) 最後にまとめとして、今の活動をどう継続させていくかが重要であると思います。

(事務局) 熱のこもった議論をいただき、ありがとうございます。課題も出させていただきました。中間支援組織づくりなど、どのように進めていくかは私どもの大きな課題と感じています。また、「山の健康」についても、三日月知事が力を入れて施策として進めて行く中においてもこの事業の経験を活かしていきたいと考えています。

本日の会議は当地で開催させていただきました。今後もふるさと水と土保全対策事業、棚田地域の総合保全対策事業について、ご指導をお願いします。

田根地域づくり協議会の皆様、また準備いただきました長浜市役所の皆様、本日はありがとうございました。中山間地域をはじめとする農山村地域の活性化を図るために引き続き、地域の方々、市町の方々と連携を図り、県として適正な施策を進めてまいりたいと思いますので、今後ともよろしくをお願いします。

次回は来年の2月頃に、引き続き「しがのふるさと支え合いプロジェクト」「ふるさと水と土保全対策事業」について、ご審議いただきたいと考えています。

本日は長時間に渡りご審議ありがとうございました。

以 上